

地域発 防災ラジオドラマ in つくば 2009
筑波小学校区（上大島・国松・沼田周辺） 地震災害編

前提条件の整理（読まない）

地震発生 冬の平日の朝9時

震源地 筑波山直下

マグニチュード 7規模

筑波小学校区の震度 6弱〜6強

天候 くもり

課題 救急対応と避難誘導

状況設定（読まない）

筑波小学校区で発生した地震は、この地域に大きな被害をもたらしました。地域住民は何が起こったのか。まだ正確に把握できていません。しかし、以前から培った顔の見える関係を生かし、比較的被害の少なかった住民を、地域のリーダーである区長、常会長、班長等が中心となってまとめ、一次避難所である児童館を拠点に、地域の安否確認や救助作業を始めました。また、情報の入手についても、個々の住民がそれぞれの知恵を生かし、また地域がそれを収集することで、より正確な情報を得ようと努力する姿が見られます。また、住民たちは避難が長期化することを想定し、より安定的な支援を受けるために、指定避難所である筑波小学校への移動を検討しはじめます。

前説（共通ナレーション・毎回放送・ナレーター別録り）

独立行政法人・防災科学技術研究所では、災害時に地域に起きることを住民主体で考えるための方法として、地域の災害シナリオの作成を提案しています。災害シナリオは、行政が作成した各種災害の被害想定やハザードマップを下敷きにして、地域の「より細かい事情」を勘案して、災害時に実際に起きることを時間に沿って具体的に整理して記述したものを指しています。災害シナリオは、地域の関係者が具体的に自分たちの直面する事態を考える仕組みづくりのきっかけとなるものです。シナリオにすることで、事態の展開していくイメージが掴みやすくなり、必要な対応もわかりやすくなります。

地域発防災ラジオドラマインつくば、筑波小学校区上大島・国松・沼田周辺、地震災害編。

このドラマは地域住民の方々がワークショップで議論した内容に基づくフィクションです。

(プロローグ・ナレーター別録り)

地震が発生して1時間30分が経過しました。揺れの大きかったこの地域では、被害の比較的少なかった住民たちが自主的に、近所の安否確認や救助作業を行っています。また、同時に常会長や班長や区長をはじめとした地域のリーダーと若者たちが一体となって、地域の一次避難所である児童館を拠点に、地域の要援護者の安否確認をはじめました……。

登場人物 (読まない)

区長

飯村班長

住民A

住民B

小野村

シーン① 要援護者の救急対応と搬送 10時30分頃
・ 近所の高齢者夫婦の安否確認と老人介護世帯の避難。けが人の搬送手段。

ナレーション(ナレーター別録り)
まだ時折余震が来る中、班長を中心とした住民たちは一時避難した児童館でまだ来ていない、高齢者世帯の安否確認に奔走していた。

住民A「班長さん、裏山の奥の小野村のじいちゃんらが来てないんだけど、誰も見ていないって言うんだよ。あそこばあちゃん歩けないからなあ。一緒に行ってもいいけど、あそこ登る道、途中でブロック塀倒れてて車で入れねーんだわ。」

♪ 足音・・・戸を叩く音・・・木戸を開ける音。

飯村班長「おーい！小野村のじいちゃん、ばあちゃん。班長の飯村だけど、中にいんのか？」

♪ 風の音と木の葉ズレの音。「おーい、おーい」の音がだんだん聞こえてくる。

住民A「庭のほうでなんか声がするな・・・。あつ！いたいた！」

小野村「ああ、来てくれて良かったよ。婆様担いで家から飛び出したのは良かったけど、俺もはあ、疲れて動けなくなっちゃってよ。婆様は前から寝たつきりで歩けねーしよ。」

飯村班長「んで、ケガは無いのけ？おう、若い何人かに手伝ってもらって倉庫からリヤカー出して来てくれっか？とにかくここじゃ風邪ひいっちゃうから児童館連れてくべ。」

住民A「ああ、んじやリヤカー持ってこさせっからちっと待っててくれ。班長さん。」

♪ 時間経過をあらわす音楽(秒針の音)

住民A「若い衆戻って来たから、リヤカーまでばあちゃんおんぶしてっもらうべ。」

♪ ガタガタと揺れるリヤカーの音と人の声

飯村班長「はあはあはあ、ほれっ、頑張れ。もうちっとで児童館だから。しっかし、いつも車で動いてるから、いざ手と足で運ぶのは大変だなあ。はあはあ、普段から歩いてねーと、だめだな・・・。」

住民A「はあはあはあ、ああ、ようやく児童館見えてきたよ・・・。おーい、おーい。」

シーン② 被災状況の把握 11時00分頃

・ 情報収集のため区長、常会長、班長、住民でチームを組織。安否確認の方法をめぐって意見の相違が出る。家族との連絡方法。唯一メールが使える。

ナレーション（ナレーター別録り）

二時間経って児童館には住民たちが集合したが、地域内の状況が全く把握できないため、区長をはじめ顔役たちは情報収集手段について話し合っていた。

区長「こうやって待っていても、電話も通じないし、役所や消防や警察からも誰も来ない。まだ児童館に集まって来ない人もいるし、道路も家もどこが壊れてるか判らないから動きようがない。で、常会長と班長は自分の地区周って調べてきてくんねーかな。」

飯村班長「それはいいけどよ、家に居るって言うてきかねー人もいるし、外から呼んでも返事が無いところもあるから、そういうのはどうしたらいい？」

区長「方が一の事があつたら大変だからなあ。呼びかけてもダメな家は、ぶっちゃけよ、ガラス窓割つてでも入って調べてきて欲しいんだよ。仕方あんめえ、人の命の方が大事だからよ・・・。」

一同「ええー！」

ナレーション（ナレーター別録り）

顔役たちももめているところ、児童館の中では・・・。

住民A「うちの上の子供は学園の方の高校に行ってるんだけど全然連絡とれねーんだわ。」

住民B「うちはさっき携帯電話つながらなかったからメールしておいたら、さっき無事だつて返事来たよ。メールは通じるかもしれないよ。」

住民A「え！でも俺メールやった事ないんだよ。子供は俺の携帯に自分の連絡先を登録したみたいなんで、本当にすまないけど、調べて代わりにメール打ってくれないかなあ？」

♪ 時間経過をあらわす音楽（秒針の音）

住民A「今メール来たみたいなんだけど、どれ押すの？・・・あ、教室で安全に避難してるってよ！良かったあ。ありがとな。携帯もちゃんと使い方覚えておかなくちゃ駄目だなあ。どうも苦手にしてたけど、こういう時は便利だよなあ。」

シーン③ 避難誘導 11時30分頃

・ 区長、市役所との連絡のため住民の避難所誘導を計る。多くの高齢者が様々な理由で避難所行きに難色を示す。話し合いの結果自宅避難と避難所避難の双方を誘導する。

ナレーション（ナレーター別録り）

児童館では区長が、自治体の支援は指定避難所で受けられると判断し、住民に公的支援を受けられるためにそちらに移るよう説得をはじめていた。

♪ 人々の声。

区長「だから、俺は避難所になっている筑波小学校まで行けば、市の支援が受けられると思うんだよ。もうすぐ昼になるし、いつまでここに居ても助けは来ねえから。」

飯村班長「そうは言っても、家に居るって言ってきたかねー人もいるし、足が悪くて歩けねえ人もいる。あんまし家に被害が無かった年寄りはや、家に帰りたいって言ってんだよ。」

区長「（大声で）おいみんな、ちょっとこっち来てもらってもいいけ？」

ナレーション（ナレーター別録り）

それから区長は住民らと話し合い、その結果、自宅避難と避難所避難それぞれを住民の意思で選ばせることにしました。

飯村班長「避難所に行く人は、一旦自宅に戻ってガス栓を止め、戸締りを確認して、かならず貴重品や食糧などを持ち出してください。それから、字の上手い石川先生にお願いして避難所に居ると記した紙を書いてもらったので、ドアに貼ってきてください。で、30分後に、またここに集合してください。」

区長「避難所へは社会福祉協議会と訓練で作った防災マップを確認しながら私が一緒に行きます。若い人らは、けが人や病人をリヤカーと自転車と車椅子で、大杉さんらは軽トラで避難所に運んでくれますか？あと、飯田さんらはこの片付けをお願いします。飯村班長はここで自宅避難の人たちの連絡係をお願いします。」

飯村班長「自宅避難する人は、今後も大きな余震があるかもしれないので、つぶされないよう、机の下やコタツにもぐったりしてください。停電が長引くとローソクを使うかもしれません、火の元には十分注意してください。支援物資が入ったら若い人らがここに運びます。私ここにいますし、定期的に巡回しますんで、何かあったら連絡お願いします。」

区長「では、一旦解散します。」

(エピソード・ナレーター別録り)

地震が発生してから2時間半近くたち、地域による安全確認や要援護者の救急対応や搬送、そして避難誘導などが始まりました。このドラマの中では地域が話し合った結果、出した結論をモデルケースとしてご紹介する手法をとっています。しかし、必ずしもその判断が正しいというわけではありませんし、地域や環境が違えば別の意見が出る可能性もあります。また、今回のドラマに盛り込まれていない要素として、乳児や妊婦など高齢者や障害者以外の要援護者がある場合やペットの扱いなども想定して考えてみる機会が必要かも知れません。

(エンディング・ナレーター別録り)

このドラマは、住民をはじめ行政など地域のさまざまな関係者が協力して、災害時に想定される事態や対応について話し合い創作されたフィクションです。ドラマのシナリオづくりの過程では、地域社会の実態を調べ、かつ、行政の防災計画や防災体制、被害想定、ハザードマップ、マニュアルなどの公式な情報を参考にしています。社会的なシミュレーションとして、また、今後の改善の視点を盛り込むなどの理由から、意図的に事実と異なる設定をしている場合があります。

本ドラマに関するご意見、ご感想などを、独立行政法人防災科学技術研究所、またはラヂオつくばまでお寄せください。

このドラマは住民はじめ行政など地域のさまざまな関係者が協力して災害時に想定される事態や対応について話し合い創作されたフィクションです。ドラマのシナリオづくりの過程では、地域社会の実態を調べ、かつ、行政の防災計画や防災体制、被害想定、ハザードマップ、マニュアルなどの公式な情報を参考にしていますが、社会的なシミュレーション（模擬演習）として、また、今後の改善の視点を盛り込むなどの理由から意図的に事実と異なる設定をしている場合があります。

● このドラマは地域住民を主体とするさまざまな関係者が協力して災害時に想定される事態や対応について話し合い創作されたフィクションです。ドラマのシナリオづくりの過程では、地域社会の実態を調べ、かつ、行政の防災計画や防災体制、被害想定、ハザードマップ、マニュアルなどの公式な情報を参考にしていますが、社会的なシミュレーション（模擬演習）として、また、今後の改善の視点を盛り込むなどの理由から意図的に事実と異なる設定をしている場合があります。ドラマの背景となっている筑波小学校区に関して若干の補足説明を以下にまとめます。

● 筑波小学校区の特徴として、公設避難所がカバーするエリアが非常に広く、災害時に高齢者や要援護者が自力で移動するには避難所までの距離が遠いという問題があります。ドラマに登場する「働く婦人の家」は沼田地区に存在し、市が管理している施設ですが、一般的な避難所には指定されていません。ここでは遠い小学校に行くよりも、地域になじみのある施設を選択するかどうかという問題があるのかということを考えるために登場させています。施設は講習室、軽運動室、調理実習室、相談室などがあり、小学校よりも新しく建てられた建物です。

● ドラマの登場人物に区長さんと常会長さんが登場します。区長さんはこのドラマの舞台となった筑波小学校区に所属する4つの地区のそれぞれを代表する住民組織の代表ですが、常会長さんは区長さんの下で住民への連絡や通達を務める班長さんを束ねる役として存在したり、地区によっては置かないところもあるようです。いわゆる住民主体の地域組織には町内会、自治会、区会などのさまざまな名称がありますが、このドラマでは筑波小学校区に現在存在している地域集団の役割をそのまま生かした形でストーリーを作りました。またいばらきレスキューサポートバイク（IRB：田辺和夫代表）は実在の団体で、国内で発生したさまざまな災害現場でボランティア活動を実施しています。なお、レスキューサポートバイクは全国的なネットワークで活動が広がっています。